

第155回 日文研フォーラム



神代文字と日本キリスト教

—国学運動と国字改良—

JINDAI MOJI and Japanese Christianity

—The Kokugaku (Nativist) Movement and Japanese Character Reform—



金 文 吉

KIM Moon Gil

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄

● テーマ ●

神代文字と日本キリスト教

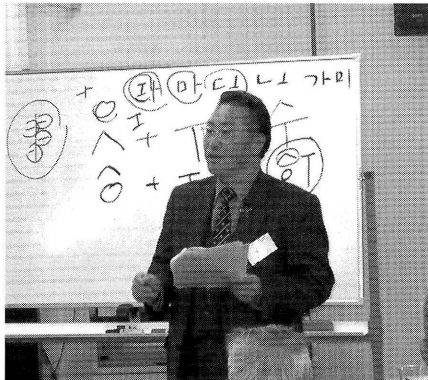
—国学運動と国字改良—

JINDAI MOJI and Japanese Christianity
—The Kokugaku (Nativist) Movement and
Japanese Character Reform—

● 発表者 ●

金 文 吉
KIM Moon Gil

韓国・釜山外国語大学校教授
Professor, Pusan University of Foreign Languages
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



2002年11月5日 (火)

発表者紹介

金 文 吉

KIM Moon Gil

韓国・釜山外国語大学校教授

Professor, Pusan University of Foreign Languages

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略歴

1988年 3月 神戸大学文学博士 (ph.D.)

1989年 3月 釜山外国語大学校日本語科 教授
大学院 修士・博士課程 教授

1997年 3月 京都大学文学部 客員教授

1998年 - 2001年 韓日日語日文学会 会長

1999年 3月 韓国学術賞 (国務総理賞) 受賞

2002年 3月 国際日本文化研究センター外国人研究員就任

著書・論文等

『日本思想と朝鮮』 螢雪出版社 (韓国) 1990年

『近代日本キリスト教と朝鮮 - 海老名弾正思想と行動 -』 明石出版社 1998年

『明治キリスト教と朝鮮人李樹廷』 『基督教学研究』 第18号 京都大学日本基督教学
会刊行 1998年

『日本高等学校歴史教科書を読み直す』 韓日キリスト教聯盟神戸青少年センター
2000年

『津田仙と朝鮮 - 朝鮮キリスト教受容と新農業政策』 世界思想社刊 2003年

一、神代文字ができたきっかけと母型

日本神代文字が作られたのは江戸時代末である。これを作ったのは、国学者平田篤胤である。彼は二六〇年間続いてきた幕府政治を終わらせ日本の国民に古典の神秘性を伝えようとして偽作したのであった。この神代文字が作られた時期は一八一一年から一八一九年にかけてで、『古史徵開題記』四卷本において論じられた。同書は春・夏・秋・冬の四卷にわけられるが、この神代文字自体は春卷の中で「神代文字の論」として書かれている。

平田が『古史徵開題記』を執筆した当時の日本は、長い間続いてきた幕府政治が搖らぎ始めてきた頃である。オランダの文化が日本に定着するときでもあった。オランダ文化である蘭学の日本への定着に対し、平田は国学を奨め発展させようとした。蘭学の西洋的なものに比べ、国学はより日本的なものを探し求めるところに目的を置いている。国学の興った時期を厳密に見てみると、江戸中期、歴史的仮名遣いの基礎を確立し、近代国学の祖と呼ばれた契沖が昔の書物や文献を発掘したのがきっかけになり、その後国学の名前と思想を展開させた人物が賀茂真淵・本居宣長である。本居は古典文献の『古事記』を研究し、『古事記伝』を書き上げて古典の復興主義的文化運動を起こした。彼

○日文四十七音

シ	ヒ	フ	セ	エ	イ	キ	ク	コ	シ	ヒ	フ
ス	ト	モ	ミ	メ	ム	ユ	ハ	ケ	ト	モ	ミ
ア	チ	ロ	ヨ	ヘ	メ	キ	カ	ク	チ	ロ	ヨ
セ	ラ	ネ	イ	テ	カ	ツ	カ	ク	ラ	ネ	イ
エ	ナ	シ	ム	ノ	ウ	ワ	カ	ク	ナ	シ	ム
イ	ヤ	シ	ヤ	マ	オ	シ	ヤ	シ	ヤ	シ	ム
ハ	シ	ヤ	ム	マ	オ	シ	ヤ	シ	ム	ノ	マ

〈図1〉

の門下生であつた平田篤胤は古典古道の道を探し求める神国思想を展開させ、それまでの学派とは違つた平田自らの国学の不動の地位を確立した。偽作された「神代文字」の『古史徴開題記』は、一八一九年に彼の弟子たちが『神字日文伝』（以下『日文伝』という）という題名で版本を発行し一般に普及させることになつた。この日文伝という用語は一、二、三という意味であり、平田が『古史徴開題記』の中で、日（ひ）文（ふ）伝（み）、すなわち神代文字と表現した。彼は、古の日本人は神代文字を和字つまり大和文字だと考えており、神字つまり神代の文字というのは皇国の、すなわち天皇の文字であると主張した。そのような神代

文字の母型は（図1）のようである。

これを見て分かるように神代文字はハンゲル文字を少し変形させた字であり全部で四十七字である。その字一つ一つに全部カタカナ音がつけてある。ハンゲルに置き換えてみると、

○ ^ウ	□ ^ム	⊥ ^ユ	ㄱ ^ク	ㄴ ^ヌ	ㅇ ^ル	ㅈ ^ツ	ㅎ ^フ	ㅅ ^ス	
○ ^ウ	○ ^ム	⊥ ^ユ	ㄱ ^ク	ㄴ ^ヌ	ㅇ ^ル	ㅈ ^ツ	ㅎ ^フ	ㅅ ^ス	ㅌ ^ッ
○ ^ウ	○ ^ム	⊥ ^ユ	ㄱ ^ク	ㄴ ^ヌ	ㅇ ^ル	ㅈ ^ツ	ㅎ ^フ	ㅅ ^ス	ㅌ ^ッ
○ ^ウ	○ ^ム	⊥ ^ユ	ㄱ ^ク	ㄴ ^ヌ	ㅇ ^ル	ㅈ ^ツ	ㅎ ^フ	ㅅ ^ス	ㅌ ^ッ
○ ^ウ	○ ^ム	⊥ ^ユ	ㄱ ^ク	ㄴ ^ヌ	ㅇ ^ル	ㅈ ^ツ	ㅎ ^フ	ㅅ ^ス	ㅌ ^ッ
○ ^ウ	○ ^ム	⊥ ^ユ	ㄱ ^ク	ㄴ ^ヌ	ㅇ ^ル	ㅈ ^ツ	ㅎ ^フ	ㅅ ^ス	ㅌ ^ッ
○ ^ウ	○ ^ム	⊥ ^ユ	ㄱ ^ク	ㄴ ^ヌ	ㅇ ^ル	ㅈ ^ツ	ㅎ ^フ	ㅅ ^ス	ㅌ ^ッ
○ ^ウ	○ ^ム	⊥ ^ユ	ㄱ ^ク	ㄴ ^ヌ	ㅇ ^ル	ㅈ ^ツ	ㅎ ^フ	ㅅ ^ス	ㅌ ^ッ
○ ^ウ	○ ^ム	⊥ ^ユ	ㄱ ^ク	ㄴ ^ヌ	ㅇ ^ル	ㅈ ^ツ	ㅎ ^フ	ㅅ ^ス	ㅌ ^ッ
○ ^ウ	○ ^ム	⊥ ^ユ	ㄱ ^ク	ㄴ ^ヌ	ㅇ ^ル	ㅈ ^ツ	ㅎ ^フ	ㅅ ^ス	ㅌ ^ッ

〈図2〉

であり、「ひ」は日本語の「ひとつ」からとった略字であり、「ふ」は「ふたつ」から、「み」は「みつつ」からきている。「ひ」「け」まで日本の数字としての意味をもつ。平田のこの神代文字は五つの母音と九つの子音からできていて、母音を母字、子音を父字という。そして〈図2〉を見ると分かるように母字と父字が合わさって一つの文字になる。韓国の訓民正音と少し違うのは、ㅇをㄱとしㅌをㅇとしㅇをㄱとㅌをㅇと表記することである。

発音上では、ハンゲルのㄱをㄱと、ㅇをㅇと発音する。字はハンゲルを変形させた神代文字を使っているが字の内容は日本語である。例を一つ挙げれば神代文字で파마다다가미と表記される内容は「大和の神」という意味である。

히, 후, 미, 요, 이, 무, 나, 야, 고, 도, 모, 치, 로, 라, 내, 시, 끼, 루, 유, 이, 쯔, 와, 메, 누, 소, 오, 다, 하, 꾸, 메, 까, 우, 오, 예, 니, 사, 리, 헤, 테, 노, 마, 스, 아, 세, 에, 호, 레, 게,



〈図3〉



〈図4〉

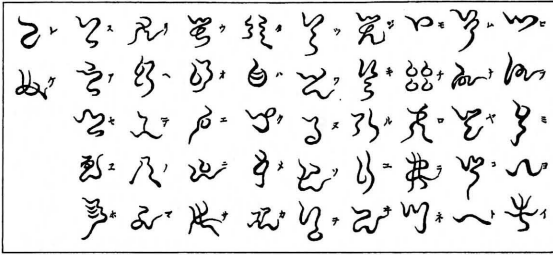
ハンゲルを偽作した神代文字による表記は、日本語としていくらかでも容易に使え、(図1、2)の母字父字は行書で書かれている。これを縦書きに使えば(図3)のようにハンゲルに似そう酷似する。

平田篤胤は神代文字を二通り作っている。一つはここまで説明した真書体であり、もう一つは草書体である。草書体は、(図4)のように日本の古文字と酷似している。平田はこの草書は上流階級の男性が使った文字であり、真書は女筆であるとした。

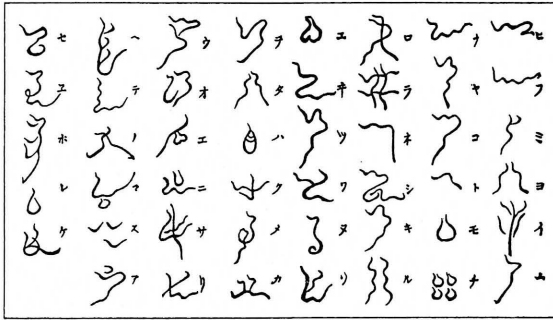
この草書男筆が古文書によく入り混じっていることがある。筆者は日本の古文書を読むとき平田が偽作した神代文字草書であることがわかり、簡単に読めることもあった。

同じ古文書研究家たちが解読できず、赤鉛筆で印をつけていることもたびたび見受けられた。

この神代文字の草書は地方によって少しずつ違った使われ方をしている。たとえば奈



〈図5〉



〈図6〉

良県の三輪神社に保管されている草書（図5）と、神奈川県鶴岡八幡宮に保管されている草書（図6）は字の形が少し違う。

平田篤胤は神代文字が神代から創られ伝えられたとしている。創られたとされる経緯を見ると日本の神話にまでさかのぼる。現れる神は、伊邪那岐（男神）と伊邪那美（女神）の二神である。二神は黄泉の国に住んでいたが、そこで伊邪那美が死んでしまう。伊邪那岐は黄泉の国を脱出し、九州地方

の日向の国阿波岐原という海岸に降りてきて、そこで黄泉の国の悪鬼どもを洗う意味からきれいな水で左眼を洗うと天照大神（あまてらすおおかみ皇祖神）が生まれ、右目を洗うと月読命（つくよみのみこと）が生まれ、また鼻を洗うと建速須佐之男命（たけはやすさのみこと）が生まれたと言われる。

そこで伊邪那岐の神が三神にそれぞれ住むところを与えた。天照大神には高天原を与え、月読命には食国（おすくに）すなわち天皇が治める国を与え、最後に建速須佐之男命には海原（うなはら）つまり海を治めよという命を与えた。しかし建速須佐之男命は父伊邪那岐の命令に従わず、死んだ母伊邪那美が住んでいた黄泉の国を恋しがった。これを知った父伊邪那岐は怒り、建速須佐之男命を追放した。建速須佐之男命は姉が住む高天原に別れの挨拶に行った。弟が兵士たちに囲まれてやってきた光景を見た天照大神は、自分の国を攻めに來たのではないかと勘違いして弟を攻撃した。しかし天照大神は劣勢になり「天の岩屋戸」というところに隠れこんでしまった。すると世界は闇となり、様々な鬼神、悪霊の世となってしまった。

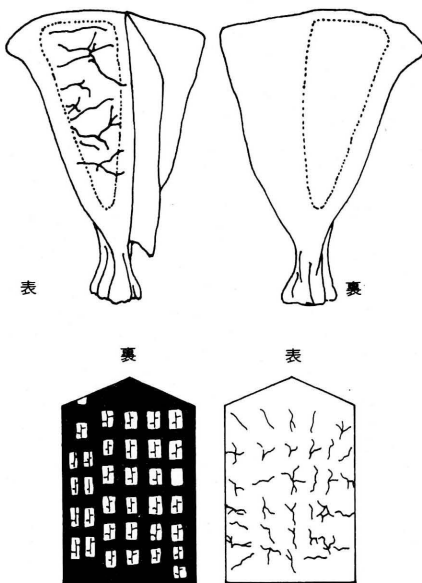
この光景を見た八百万の神たちが話し合いをし、天照大神が出てくるように策を練った。知者の神である思金神（おもいかねのかみ）が思いをめぐらし、伊弉許理度売命（いしこりどめのみこと）が鏡を作り、玉祖命（たまのおやのみこと）が珠を作り、天

牟力命（あめのちからのおのみこと）が剣を作り、自分たちが作った礼物をささげて祭壇を設け、声が自慢の神天兒屋根命（あめのこやねのみこと）が祝詞をうたうと、「天の岩屋戸」の門が開き天照大神が出てきて世界に光が戻り悪鬼のいない世界に戻ったという神話である。⁽¹⁾

この祝詞（神に申し請う文）は、天照大神が「天の岩屋戸」から出てくるようにと願う祈りである。祝詞を捧げる天兒屋根命が神代文字で初めて祝詞を作った。この天兒屋根命の子孫により対馬の国、ト部阿比留家門に伝えられていて阿比留文字（あひるもじ）という。ト部阿比留は神代文字を天日字（あひるもじ）とも言う⁽²⁾。そして平田篤胤は天兒屋根命が神代文字を創作したのは、鹿の肩骨を火で燃やしたとき骨に入ったひびの形で創ったと主張するのである（図7）。

平田篤胤はこれを鹿占法といい、裏のひびは神代文字の真書体で表のひびは草書体になると主張する。このようにして創られた神代の文字だが、大陸の文化圏の影響を受け、千文字や論語などの漢字が入って来ると、神代文字は寺と神社に葬り去られていた。長い武家政治の下にあっても日の目を見ることはなかったが、江戸後期の幕府の功臣であった佐藤信淵がこの文字を集め始め、朱子学の大家でもあった新井白石が研究を始めることにより、神代文字は再び日の目を見ることになった。そして国民もこの字を使う

鹿占 圖



〈図7〉

朝鮮世宗大王が訓民正音を創る前のお金で、それには、ひやエ字がすでに記録されているなどではないか。このような資料に基づけば神代文字が朝鮮の訓民正音に似ているなどは到底言うことができない、と力説した。⁽⁴⁾

二. 神代文字の存在論と否定論

1. 日本国内の論争

神代文字を偽作した平田篤胤は、前章で述べたように、師の本居宣長が国学の基礎を

ようになった、と偽説を唱える。⁽³⁾

また平田は、この神代文字は朝鮮世宗大王が要求していつ持つて行ったのか不明であるが、それを土台にして訓民正音がきたと主張し、最近、神代文字は朝鮮のハングルより変造されたといううわさを聞くが、朝鮮の古代に使われた「元祐通寶」を見れば、それは

形成したのに対して、これを育て花咲かせた完成者といえる人物である。彼は師の学問とは別に、国学の道を再評価する作業に入った。この流れの中で『古史徵開題記』を著し、神代文字の『日文伝』を偽作した。彼が古典再評価の観点から古典研究を始めた時、すでに師の宣長は『古事記伝』に、「上代の人々には字がなく、人々は口で伝え耳で聞くという方法で、意思の疎通をなしてきたが、外国から書籍が入って来たため、字を読み書くようになった」と、漢字が入る前の日本には日本固有の文字がなかったと述べている。また同時代の同学の士である伴信友は、篤胤が神代の文字があったと『日文伝』に書いたとき、反論として『仮字の本末』により、「朝鮮の文字が早くから日本に入ってきて変形したものが『日文伝』であり朝鮮諺文との不可分な関係にあるといい、「今日本で神代文字がとり沙汰されているが、江戸時代以前には何の議論もなく、また神代文字があったという文献も存在しない」と否定している。それだけでなく、江戸時代末期つまり国学運動が活発に起こった時期、国学の師や同学者たちは皆、日本古代神代期に固有の字はなかったと反発さえしている。

その後、一八六八年明治維新により江戸時代が終わり、篤胤の意を継いだ弟子たちが大挙して新政府に参画していくのだが、中でも篤胤の子孫である落合直澄が日本神代文字の優位性を論じつづけた。彼は明治六年に「神宮教院」（神道学校）を設立し、神道

学を国民に普及しつつ、神代文字は日本の神代の固有の字であるとし、この字を鎌倉時代に卜部兼方が直し平田篤胤膝下に入って明治期には落合家紋の字となったと述べた。彼は明治二一年に『日本古代文字考』という冊子を出し、神代文字の優位性と存在性を論じた。落合は「日本神代文字が万国の字の源となり、朝鮮に入り諺文となり、上流層は漢字を使ったが、中流層以下は神代文字を変形した朝鮮諺文をあまねく使っていた」と言及しており、平田の神代文字の継承者だと言われる。

そして直澄の弟子でありキリスト教界の指導者でもあり国文学者としても名高い宮崎小八郎が、日本が日中戦争で相次ぐ勝利を収め太平洋戦争に突入した翌昭和十七年、『神代の文字』という書物を出し、グアム、フィリピン、マニラ、マレー半島、上海方面で勝利を重ねているのは他でもなく、日本軍人には大和魂の精神があり、そして神代文字があるからだと述べた。また神代文字の存在説で言われることは、現代の人たちは神代文字など無いというような無知蒙昧なことを言っているが、その存在は東西の学者たちが認めてきたことで、ドイツの学者シュタインも明治政府の招請を受けて来日、日本の固有文化として神代文字があること聞き知り非常に感嘆し、帰国してから神代文字がローマ字の字源になっているといったことや、またドイツの学者パイ・ケムベルマンが日本神代文字の卓越性を主張する論文などを見ても神代文字の優越性は否定できない⁽⁸⁾。

という。

明治維新になるや、多くの学者達により国語学再論と同時に神代文字についても論じられた結果、国粹主義者の主張に再び従い始めたことは事実である。

また敗戦後の昭和二四年、吾郷清彦は三重県に「古道体系研究所」を設立し日本神学連盟常任理事として神代文字を講じ、『日本神代文字、古代和字総観』を発行した。

歴史的にみても時代によって様々な論議がなされてきている。国学者として広く知られている山田孝雄は、八〇七年（大同二）に齋部広成が詳述した『古語拾遺』には、「しかし聞くところに、上代時代にはまだ字がなく、老若男女、貧富の差に関係なくすべての人が口で伝え、耳で聞いていた⁹」との記録だけしか残っていないと否定している。また山田孝雄は、神道研究家としても知られていて、神代文字は後世の偽作であり、尊皇思想として台頭した、とも断言している。また平田篤胤が書いた『日文伝』すなわち神代文字は「寛政五年に京都の僧、教光が書いた『和字攻』、桐生人の中沢宏が書いた『神字の調査』という本にも神代文字は偽作¹⁰」と記録されていると主張する。

また国語学者の大野晋は『日本古代語入門』で「神代文字というが、時々神社で発見されるのを見ると、その字体は非常に珍しい。主に多く出る神社は茨城県の水戸地方だが、一字一音の文字で全部で四七字からなっている。このような神代文字は後世に偽作

されたことだ」(佐治芳彦『謎の神代文字』一四七—一四八頁)と否定している。また日帝時代にハングルを研究した小倉進平と金沢庄三郎も国学者伴信友の否定説を認めており、神代に文字はなかったと主張している。この二人の言語学者は、日鮮同祖論を唱え、とくに金沢は言語面で同一性を主張し、平田の『日文伝』はハングルを變形したものだ⁽¹¹⁾と断言した。

またハングル研究に多くの貢献をもたらした金允植は「日本では今から二、三〇〇年前に神道家と、愛国心を持った何人かが自国に古代の文字がなかったことを恥ずかしく思い、密かに朝鮮文字を真似た字体を石に刻みそれを山中に埋めておき、わざと他の人と一緒にそこへ行き思わぬ発見をしたかのように石を掘り出した。そしてその文字を見て神代文字だと主張した。またそれだけでなく、朝鮮の訓民正音はその神代文字が朝鮮に伝わったものだ⁽¹²⁾とまで主張した」と植民地時代にも唯一神代文字を否定してきた。

こんにち、日本人は神代文字は後世の偽作だと認めてはいる。しかし一方でもう一度神代文字を認めようとする研究家達が登場し、書店では神代文字というタイトルの本が現れ、これへの反論も出ている。

2. 韓国内の論争

筆者は日本で古書や古跡を調査し、いわゆる神代文字の発見について研究し『白山學報』に発表したことがある。当時、神代文字の論争はすでに学会で行われており、この発表も報道された。その論争内容を紹介する。

世界平和教授協議会が出版した『広場』第一二五号を見ると、当時アメリカのベイロ
— 大学名誉教授で韓国思想史を専攻する宋ホシユ氏は「ハンゲルは世宗大王以前にもあった⁽¹³⁾」というテーマで次のように話をしている。「ハンゲルに似た日本の昔の文字として、日本では神代文字を研究している学者が多く、著書も相当数ある（およそ九七種）。また昔の文字もいろいろな形でかなり発掘されている。中でもいわゆる神代文字のうち、『阿比留文字』はハンゲルとよく一致する。それで彼らは阿比留文字が歴史的に古い文字でありこれを『親』格だとすれば、ハンゲルは『子』であり、阿比留文字とハンゲルは『親子』と言える」と紹介し⁽¹⁴⁾、「檀君第三世カルック王の時に作られたカリムタ（加臨多）をハンゲルの起源として見なければ、日本での阿比留文字を真似して訓民正音ができたという説は無視できないことだ」と日本の神代文字を認める⁽¹⁵⁾。

宋ホシユ氏の認定説は、「ハンゲルは、カリムタ文字三八字から二八字をとり、訓民正音二八字が成った」という。この論文が発表されるや、ハンゲルを研究してきた李観

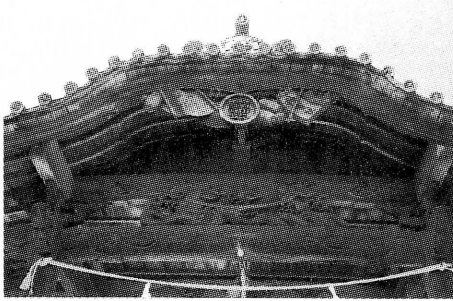
涿氏が、一カ月後の一九八四年二月『広場』一二六号に、世宗大王の訓民正音が作られる前にはハングルと同じ文字はなかったと反論し、宋ホシユ氏のカリムタ文字説を否定した。李氏は、「我々は世宗大王の時に訓民正音が作られたという説を定説として信じていて明白な証拠も持っている。従来 of 定説を否定するとすれば、その説の不当性を論証し、裏付けとなる根拠を提示しなければならぬ。檀君時代、原始ハングルがあったとする『檀君古記』や『神代文字』の資料は従来の定説を覆すほどの科学的根拠がない。この種の記事の中では、今まで調査された世宗実録卷一〇二の世宗二五年（一四四三）亥十二月初めの記事が訓民正音創生に関する文献上で最初のものだ。檀君三世のとき、ハングルがあった、日本古代に神代文字があった、日本神代文字とハングルとは親子関係だ、など一連の主張は根本的に歴史観と言語観の差である。『神代』を肯定する社会から作られた神代文字観は、現代言語哲学としては受け入れられない言語観だ」と反論している。

三、神代文字と大内神社

筆者は日本学（日本文化史）の研究で数年間を神戸で過ごした。所属していた学科は

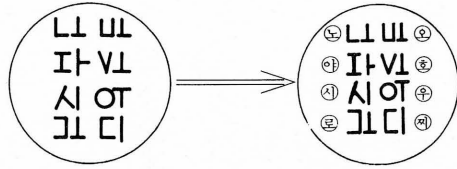
年に数回古跡探索を行っていた。

一度備前（岡山県）の大内地方を踏査したことがある。この地方は備前焼で有名であるが、この焼き物は、おもに韓国から流れてきた文化のひとつであって、よく知られているように、韓国の新羅時代にこの地方に伝播した新羅土器である。調査チームが駅に降りて足を運んだのは大内神社である。境内に入ってまず目を引くのは日本の神代文字である。神社本殿の屋根の正面にハンゲルである神代文字が刻まれている。木の皮で屋根が作られていて、そのひさしの右側に「神寶記」と書いた木の板がかけられている。神代文字はこの神社の神宝という意味である。「神寶記」は本のように作られていて、昔の文字である神代文字を祭っていると説明されている。「神寶記」と共に掛けられている筆もある。この筆で神代文字を書いたという意味であろう。その横に神代文字が掛かっている。神代文字は二種類に分けてかけられている。ひとつは真書体である「肥人書」で、もうひとつは草書体の「薩人書」である。



〈図 8〉

大内神社を訪れる人々はまず神代文字がかけられている



〈図9〉

格するようにと祈る学問の神もいる。

大内神社は参拝客の言葉どおり、神代文字を奉納する学問の神を祀る神社で、この神社に参拝すればどんな試験でも合格できる、と信じられている。それでは大内神社に掲げられている神代文字はどういう意味をもって表示されているのかを解いてみよう。

〈図8〉の神代文字の原案となった文字を見てみると、山字はQ1字と表示されるべきものが山に表示されたものと推測され、山は神代文字四七字に無い字である。これを

屋根を見て参拝する。筆者は参拝客に、屋根の下のとこに書かれている文字は何の文字ですかと尋ねると、皆が次のように答えた。遠い昔の日本の文字ができる以前の、神代の時代の文字であるという。ではどうして神代文字を見て、柏手を三回打ちお辞儀をするのかと尋ねたところ、大内神社は神代文字を祀る社であり、昔から学問の成就を祈願する神社であるから訪ねてきたと語った。要するに、この神代文字を参拝して、受験生は知恵を授かり合格できることを願うのである。筆者が参拝客の話聞いて思ったのは、日本の神社の祀る神はその種類が多様である。若い男女の縁を結ぶ縁結びの神があり、商売をする人が繁盛を祈願する商売の神があり、また勉強する人が試験に合

ハンダに直してみると「오호우찌노야시로」となる（図9）。

「오호우찌노야시로」はオホウチノヤシロ、すなわち「大内神社」という意味である。古代より近世まで神社は全て「やしろ」と言っていた。『氏神が定着したもの』という意味でつけられたものである。岡山にある大内神社は大内氏の先祖を祭る神社である。岡山地方を治める氏族が大内氏であった。

大内氏族の系譜では、六一一年推古天皇の時百濟の聖明王の三番目の息子である琳聖が周防（山口県）吉敷（よしき）の大内村に土着して、山陽地方と山陰地方一帯に子孫を繁栄させた、と伝えられる。岡山大内村にも社を置き、勢力を繰り広げていたという。岡山地方には大内という地名を持つところが多い。

四. 神代文字と『六合雑誌』

1. 『六合雑誌』

『六合雑誌』は日本のキリスト教系の総合学術雑誌であり、一八八〇年（明治十三）十月に創刊された。「六合」とはコスモスの意で、東・西・南・北・上・下、すなわち世界または天下を指す。この誌名を付けたのは、日本近代社会で農学者、あるいは教育家・キリスト者として名を知られていた津田仙であった。津田は日本社会だけでなく、

韓国のキリスト教受容史においても大きな役割を果たした人物である。⁽¹⁶⁾

この雑誌の主筆は牧師・小崎弘道であり、彼は明治維新後、洋式教育の藩校として有名だった熊本洋学校に学び、京都の同志社英学校を経て上京、新肴町教会（後に靈南坂教会となる）で牧会活動をしながら同誌を創刊した。『六合雑誌』が学術誌として学会に広く知られるにつれ、社会各層の人士たちが投稿するようになったが、中でも植村正久、海老名弾正、徳富蘇峰、大西祝などがとくに著名であった。

『六合雑誌』は、宗教・学術・教育・文学・社会・政治・言語など幅広い分野を扱っており、当時の日本の社会の近代化を先導する位置を占めていた。また当時の日本を知ろうとした外国人にも大きな架け橋のような役割をも果たしていたのである。小崎は一八八一年（明治十四）四月二〇日、第七号に「近世社会党ノ原因ヲ論ス」という論文を寄稿して、初めてマルクス思想を紹介したこともある。

『六合雑誌』が社会や学会で人気が高まった頃、海老名弾正や小崎弘道が活動していた場所は東京大学周辺の文教地区であり、多数の俊秀の集う場であった。その中で安部磯雄のような人は、小崎弘道のマルクス思想を聴いて感動を覚え、一八九八年（明治三一）日本で最初に社会主義研究会を組織したのである。この社会主義研究会から幸徳秋水、石川三四郎らが輩出され、社会民主党が組織された。彼らは日露戦争が勃発すると、

内村鑑三とともに非戦論を展開させたこともあった。『六合雜誌』の刊行は四〇年にわたったが、一九二二年（大正十）第四七八号をもって廃刊された。

その『六合雜誌』上で神代文字に関する論争が学界、政治界あるいは社会の指導者の間で展開されたことがある。

2. 平岩愼保の神代文字論

『六合雜誌』に平岩愼保という人物が神代文字に関する論文を掲載した頃、日本が近代化に向けてどのように動いていたのかを見ておきたい。

中世社会から江戸幕府に至るまで数百年間続いた武家政治は、江戸幕府末期に興った国学思想の動きと、国外からの西欧文明の侵入により崩れ、明治維新が断行された。新政府が樹立されると、一部の人士たちは西洋文化の受容に積極的な姿勢を見せはじめ、伝統的な日本文化を西欧文化に変革しようとする動きが起こった。

その一例として、森有礼⁽¹⁷⁾は「明六社」という西欧文化を研究する団体を作った。当時の「明六社」の構成メンバーを見ると福沢諭吉、西村茂樹、津田真道、西周、中村正直、加藤弘之、箕作秋坪、杉亭二、箕作麟祥、津田仙など三〇人の重鎮たちである。彼らは『明六雜誌』を創刊し、開化思想を広めようとした。森有礼は『明六雜誌』を通して、

日本人を啓蒙するためには、日本の男子は外国の婦人を迎えて結婚すべきであるという「混血改正」を主張した。また、新時代に合わない難しく使いにくいカタカナとひらがなを捨てて、西欧の文字であるローマ字を使用することを主張した。「日本が国際的な独立を保つためには、英語の習得が必要不可欠であり、日本国民が西欧の科学、技術、宗教等を摂取する上にも、日本語のような貧弱で不確実な伝達手段に頼ることはできない」とし、「日本語廃止論」まで強力に主張した。また、西周は『明六雜誌』の創刊号で「洋字「英語」ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」を、西村茂樹は「開化ノ度ニ因テ改文字ヲ発スヘキノ論」などを発表した。こうした影響によって、日本ではローマ字が初めて取り入れられて使われ始め、難しい日本語や古典語が影を潜め、外来語の影響を受けて使われている日本語が大きく変化するようになった。

森有礼を中心に「明六社」の会員たちが欧化運動を進めるにつれて、これに対決する国粹主義が台頭した。国粹主義者の中にはキリスト教界の指導者らが多数含まれていたが、その中に平岩愼保という牧師がいた。平岩は一八五六年（安政三）十二月、江戸の小石川安房町で生まれ、一八七〇年東京府立洋学校に入学して西洋の学問を学び、一八七三年には開成学校（東京大学の前身）理科に進んだ。一八七五年、カナダのメソジスト教会宣教師カクラン（G. Cochran）から洗礼を受け、同派の牧師に就任するに至った。

カ	ナ	ヤ	サ	ハ	ア
ク	ネ	シ	セ	ヘ	エ
キ	ニ	ユ	シ	ヒ	イ
コ	ノ	ル	シ	ホ	オ
ク	シ	ル	シ	ホ	オ

カ	ナ	マ	ハ	カ	ク
ク	ケ	メ	ヘ	セ	ク
キ	キ	ミ	シ	シ	ク
コ	ク	ミ	シ	シ	ク
ク	ク	ミ	シ	シ	ク

〈図10〉

平岩は言う。日本の在来の思想を根絶やしにし、その上に外来の思想を植えるとは危険千万のことである。外来文化を受け入れることで、元来の日本文化を損ってはいけない。日本の精神を変えることはできない。日本の精神はあくまでも大和魂を志向すべきである。大和魂は外来文化を憎んだり、逆らったりすることではない、と。⁽¹⁹⁾

平岩がこうした思想を固守する理由は、彼の育った家柄が代々幕臣であったことからきているかもしれない。祖先である平岩親吉は、一五九〇年（天正十八）小田原城攻めの際に功を立て、徳川家康の関東入国に伴いその幕臣となっていた。平岩は、欧化主義者らが日本語を廃止し、ローマ字を使う運動を繰り広げた時、神代文字を取り上げ、〈図10〉のような神代文字を使おうと主張した。

『六合雜誌』第五十号（明治十八年一月）に「日本文字ノ論」という題目で寄稿したが、彼は神代文字を知るようになったきっかけを、静岡にある自宅に、ある国学者が訪れた際、彼から神代文字とその仕組みについて聞き興味を覚えた、という。

仮名	ア エ イ オ ウ ウ フ ブ プ ス ズ ユ ム ン ク グ シ ジ ル
神代文字	ト 十 丨 丂 丁 ㇀ ㇁ ㇂ ㇃ ㇄ ㇅ ㇆ ㇇ ㇈ ㇉ ㇊ ㇋ ㇌ ㇍
英字	A E I O U W H B P S Z Y M N K G T D R

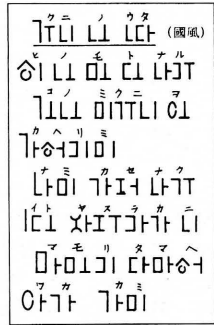
〈図11〉平岩愼保「日本文字ノ論」『六合雜誌』
第51～52号から

平岩は西欧諸国家のほとんどが「アルファベット」を使っているように、日本においても意味は日本語であつても、文字の表記は朝鮮のハングルを偽作した神代文字を使うことを主張したのである。彼は神代文字で日本語を表記してみると、非常に簡単で使いやすく、日本語は縦書きが普通であつたが、神代文字で横書きをすると文字の形もきれいでであると述べた。⁽²⁰⁾

以下の図はカタカナと神代文字でローマ字を表記する際に、どちらが便利で正確であるかを比較したものである。

平岩は図のように、神代文字に日本語で使う濁音（゛）（゜）まで打って使用しており、ローマ字の「N」と「T」を表記するのにカタカナには適当な文字がないが、神代文字には正確に表記できる「㇀」と「㇁」があると喜んだ。また、日本の文字は文法的な面をはじめ、すべての面であまりにも難しいので、日本人だけでなく外国人も日本語を学ぶのに困難な点が多く、国の文化を発展させるためには何よりも言語がやさしくなければならぬと指摘し、また、日本語はもともと仏教の経典から作られたため、思想的

な流れについても気に入らないと思つたのである。⁽²¹⁾ また、ひらがなとカタカナは漢字からできたため、同じ文字であってもさまざまな形で表記され、非常に読みにくいと指摘した。たとえば、ひらがなの「ま」は、書く人によってその形が「ま」や「𛄁」と書かれる場合があり、さらに「マ」と表記される場合もあると指摘、また「に」という字も「よ」や「ふ」と書かれるので紛らわしい。さらに「の」の字を「𛄁」と書くとか、「な」を「𛄁」や「ふ」、「す」を「𛄁」や「あ」や「𛄁」と書いたり、「り」を「𛄁」、「た」を「𛄁」、「が」を「あ」や「う」と書くこともあつて、一般庶民が学ぶのに非常に難しいと述べる。⁽²²⁾ 漢字は様々な形で表記されていたため、そこから形づくられるひらがなもいろいろであつた。また、漢字の発音は、ひらがなやカタカナでは正確に表記できないと指摘した。さらに漢字を使った単語にもさまざまな発音が存在した。一例をあげると、「提燈」という単語は、人によつて「テヨウチン」「テヨフチン」「チオチン」など、さまざまな形で表わしており、どれが正確な表記なのかが分かりにくく、発音も正確でない⁽²³⁾と指摘し、すべての言語文化は正確に統一された言語によつて形成されるべきであると主張して、「提燈」の発音表記には「ㄊㄧㄨㄥ」という神代文字がもつともふさわしいと述べた。日本語は「アルファベット」のように組み合わせて発音されないため、正確な発音を形成しにくく、「神」を「カミ」というように二文字で発音するから正確な



〈圖12〉

發音が出てこない。すなわち平岩の考えは神代文字の表現をローマ字で表現すると正確な發音になり、例えば、「가미」、つまり「+ト||カ、ロ+||ミにすればローマ字のように K+A=KAM+I=MIとなり、正確な發音が可能であると説いた。

要するに平岩愼保は日本語を神代文字で表記しようと主張したのである。彼は日本語で詩を作り、神代文字で表記してみることにした。

彼が書いた詩の題名は「国の歌」、つまり国風の歌である(圖12)。国風は日本の国民が楽しんで歌っていた民謡である。韓国のアリランやトラジのような歌である。この歌が流行したのは平安時代、流行させたのは和歌の大家である紀貫之である。和歌の詩法は六つあるが、その中で第一は国風であると言った。では、平岩愼保が歌った国風は何かを韓国語に翻訳してみる。

「해에 바탕이 되는 나라

(신이) 돌아보시고

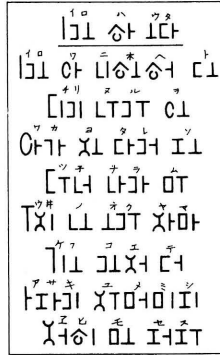
과도와 바람하나 없이

아주 잔잔(편안)하게 하소서

우리 신이시여」

このように歌い、これを神代文字で表記してみて、非常に美しくきれいな文字体であると感嘆した。⁽²³⁾

また、古代社会から日本の国民がよく楽しんで歌ってきた古詩「いろは歌」を神代文字で表記して感心した。



<図13>

日本語 色は匂へど散りぬるを

我が世誰ぞ常ならむ

有為の奥山今日越えて

浅き夢見じ酔ひもせず

韓国語

꽃이 피어 곱지만 떨어지는 것처럼

이 세상의 모든 것은 허무한 것 뿐이지만

진리를 알고 깨달은 때는 크라과

같이 즐거운 기쁨뿐이로다

このように神代文字で表記して、その存在価値・文学的な珍しさを語り、外来語であるローマ字に対して、神代文字を採択することを主張したのである。

五. 神代文字を偽作した国学者 平田篤胤

今まで考察した神代文字は偽作であり、偽作者が国学者平田篤胤であることはすでに紹介した。この章では日本国学とは何か、平田篤胤とはどんな人物で、なぜ神代文字を偽作してまで日本固有の文字だと言ったのかを明らかにする。

日本国学とは、儒教、仏教、洋学など外国から入ってきた思想・学問に対抗して日本の古典研究に立脚し、古代の純粹な精神を究明して古代社会に戻ろうとする自主的精神を元に始まった日本固有の学問思想である。このような思想が登場したのは江戸時代中期のことであり、十八世紀後半から十九世紀にかけて発展し、十九世紀半ばの明治維新初期までつづいた。

この思想は形成・発展するにあたって、国学とはいわず古学、和学、皇学、本教学な

どと称した。国学と言われ出したのは明治新政府ができた頃からである。国学の形成初期には単なる古典学研究に過ぎなかったが、次第にその思想が多様化すると同時に国学内部に分派が生じ、学問の水準も高くなり国学の主流が明確になってきた。その中で契沖、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤らは、日本国学の父と言われているが、同時代、同じ国学ではなく、それぞれが独自の思想を展開してきた。

契沖は一六四〇年、摂津（尼崎市）に生まれ、代々が僧侶の家柄により、彼も高野山に入り真言宗の道を歩みながら古典学研究を始めた。七世紀から十世紀にかけて編まれた日本の古典は、長く続いた武家政治の期間注目されることなく寺院、神社に古書として扱われていた。このような状態を認識した契沖は古書の一つ一つ集めて研究をした末『伊勢物語』『源氏物語』の注釈を初めて行い、『万葉集』を研究して字句の精密な考証によりこの時代の人々に読みやすい研究書『万葉代匠記』を著わして古典の研究にすぐれた成果をもたらした。契沖は古典を集め最初に研究した学者であり、彼の研究成果により後世における古典学研究への道が開かれ、彼は国学の開拓者と呼ばれるようになった。彼の影響で荷田春満や賀茂真淵など国学の巨星たちが登場した。

荷田春満は一六六九年、京都伏見の稻荷神社の神職の嫡子として生まれ、契沖の古典学の影響を受けて神道の教理と思想を初めて創り、神道の形成に貢献した。同時代人で

ある賀茂真淵は、契沖の古典学と荷田春満の神道思想を一体化させ、『冠辞考』等を編集、日本の固有思想を賛美し、儒教・仏教・洋学等外来思想排斥運動を展開した。また最年少の同時代人本居宣長は、契沖の古典学と荷田春満の神道思想と賀茂真淵の外来思想排斥運動を総合検討した結果『古事記』を自分なりに研究し『古事記伝』を発刊し、これまでなかった復古思想を立てた。復古思想は、彼が生きた徳川時代の武家政治を批判し古代王朝国家に戻そうとする運動で、この思想が尊王運動の原型になった。

このようにして国学が形成された一世代後に、平田篤胤が登場した。彼の思想と生涯は後述するが、一言でいえば篤胤が国学を結実させ、国学の道を完成させたのである。彼の独自の国学思想は、契沖、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長の古典学を批評しながら神代史を発掘し、神話の創造を重視しながらついに神代史という『古史徵開題記』を編集するまでに至る。この『古史徵開題記』の中に国学者達が否定してきた神代文字がある。彼の門下から多くの国学者を輩出、彼らが、幕末維新时期になって国学の根本思想である王政復古をかかげ、尊皇攘夷運動に大きな影響を与えた。

篤胤は国学者の中の巨星と言われるが、なぜ神代文字を偽作し、それが神代からあった日本固有の文字と主張したのか。この章では篤胤の生涯と神代文字を偽作するに至った思想を論じる。

平田篤胤は出羽国（秋田県）の佐竹藩士の子として生まれた。二十歳のとき、江戸に出て苦学しながら学問を習った。当時新学問とは国学をさすが、国学は、朱子学を「静」とすれば「動」の関係だったといえる。日本の朱子学は、中国宋の朱熹が五経（詩、書、禮、春秋、易）を中心とする儒学を批判した四書（大学、中庸、論語、孟子）を中心に、孔子、孟子の精神を把握しようとする学問である。朱子学は鎌倉幕府末期から室町幕府初期にかけ、禅僧たちによる五山文学によって受け入れられ、江戸幕府成立時の大義名分（君臣関係、身分差別）となり幕府の学問としての基礎を整えた。

幕藩体制の動揺期に、篤胤はこのような朱子学を大義名分だけを立てる時は正統教学として「静」と考え、大義名分から脱皮しようとする意図では「動」と考えた。この「動」が国学と言えぬ。こうした観念で当時流行していた国学に手をつけはじめ、一八〇〇年（寛政十二）二五歳の時備中国松山藩の国学者平田篤穂の養子となり、以後平田姓を名乗る。平田家に蔵する国学者の書籍、特に本居宣長の国学書籍を多数読み感銘を受け宣長の弟子を志すが、宣長の死により果たせず、一八〇五年（文化二）以降『新鬼神論』『古道大意』『靈能真柱』（たまのみはしら）等の書物を出版して国学者として頭角をあらわし、江戸末期にはひろくその名が知られる人物になった。当時神道系で正当性と慣例をよく守り一番の勢力を持っていた吉田神道家（卜部兼具唱導）に教授として

招かれ、吉田神道の指導者になった。平田の学問が世に出て、京都で平田学派とよばれるようになった頃の天保年間（一八三三—一八三八）は凶作による飢饉が続き、社会不安のなかで平田の学説は反応がよく、農漁村では平田の思想を信じる者が多かった。一八四三年六八歳で故郷の秋田で世を去った。

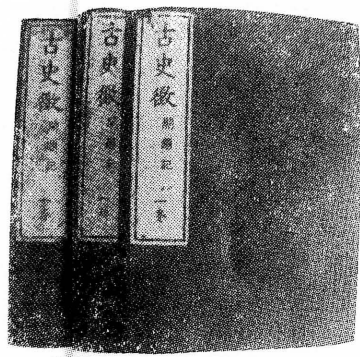
〈平田篤胤の思想と神代文字を偽作した動機〉

すでに説明したように、平田篤胤の国学思想は彼の師匠たちが主張する古典の文献学的考察と古典学の物事に対する感情思想を一転し、本居宣長の国学思想には見られない『新鬼神論』を主張して彼の思想は頂点に達し、平田学が形成された。『新鬼神論』で主張する学説は、人間は死んでも靈魂は永遠に存在するとする靈魂二元論的立場である。これは宣長の「鬼神論」が主張する人間が死んだ後、その靈魂はこの世を彷徨い、鬼を祀れば災いを受けないという一元論に反対する立場をとっている。

また篤胤は、天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神の三神を基督教の三位神とする創世神話を主張した。このような主張は彼の先人達が言及していない独特の学説の一つで、天之御中主神は天地創世の唯一神、基督教のエホバ主神であり、高御産巢日神は人類を支配する神で基督教の聖者の神、すなわちイエス・キリストであり、神産巢日神

は人間の生死禍福の神という。篤胤は西学に興味を持ち、当時中国に滞在していた天主教の宣教師マテオ・リッチ (Matteo Ricci: 1552-1610) の『畸人十篇』などの天主教書の影響をうけて『本教外篇』を著した。²⁴⁾ この書は、天主教の神学をそのまま適用して日本神話を解釈し、創世神話も天主教の神の摂理と同じようにみて彼の神学を作った。篤胤の神学は、従来の国学者達の主張を覆して、多神教から唯一神的思想を主張し、神を普遍的存在としたのである。靈魂の極楽世界、すなわち浄土觀的思考方を捨て、天主教でいう「煉獄」で審判をうけ来世にいくと述べている。このような平田神学、若しくは篤胤の国学思想を後継者たちが受け継ぎ、日本神話と密着させ基督教的な神話研究が登場し、虚説に過ぎないイエス・キリストが日本に來た、イエスの墓がある等の伝説が残るようになった。平田篤胤の国学思想の中で独特なのは、日本神話を基督教(天主教)的思考から解釈したことであり、これが彼の根本思想で彼の神学の原点である。

彼はこのような神学的思考から国粹思想と尊王思想を主張するとき、これに神秘性を与え、民衆に受けいれやすくするため神話を偽作し、神代文字を偽作した。彼が吉田神道の教授職として神道を講義中の頃、彼の門下生柴崎直古が駿河国(静岡県)府中に平田を招待し古神道の講義を聞き、篤胤に神代史の研究をさらに進め後世に伝えるようにと請願した。篤胤は普段から考えていた事でもあり、古書(『祝詞式』『日本書紀神代卷』



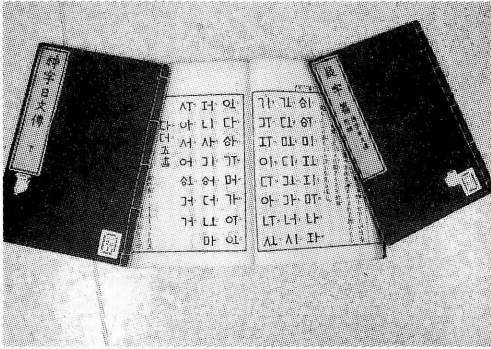
〈図14〉『古史徴開題記』（東京無窮会図書館所蔵）

『古事記』『古語拾遺』『新撰姓氏録』『出雲風土記』『古事記伝』など数十巻）を集め数カ月間をかけて研究し、文化二年（二八〇五）に『古史徴』を刊行した。

『古史徴』の第一巻が『古史徴開題記』であり「春」「夏」「秋」「冬」の四冊がある。「春」巻に所謂「神代文字」について初めて触れた。「夏」巻では今まで見られなかった神代史、特に天皇の系譜を正確に証明し、「秋」巻は「祝詞」（神歌）等を記録したもの、最後の「冬」巻では『古事記伝』の批評等が収録されている。

『古史徴開題記』を彼の門人たち、越後国（新潟県）高橋国彦、筑前国（福岡県）相田饒穂、出羽国（秋田県）佐藤信淵が『神字日文伝』（図15）と命題して再版したのが一八一九年（文政二）春のことである。すなわち朝鮮国の世宗大王が「訓民正音」を編集した約四〇〇年後のことである。

『神字日文伝』の上巻は神代文字の抄書である肥人書を収録し、下巻は「疑字篇」と名づけ神代文字の抄書である薩人書である。



〈図15〉『神字日文伝』

このように篤胤が偽作した神代文字は、彼の門人たちにより『神字日文伝』として世に出、国会図書館や各機関に保管され簡単に研究できるようになった。数百年間にわたる武家政治を王政に戻そうとする彼の思想は、明治維新という巨大な政治改革の断行により現実化した。王政復古の基盤を整え天皇絶対思想をつくり「神仏分離」政策を断行した平田学派の後裔達は、神道の要職者として神代文字と関係した祭儀をおこなった。

彼のいう「歴史は後ろを向き、前に前進する」のように古代国家にもどってしまった。戻ったのは、古代文明社会の律令国家ではなく、また大陸政治のモデルといわれた聖徳太子の摂政政治でもなく、さらに昔の神代の神武天皇王朝にまでさかのぼる。

神代文字を偽作した彼の思想は次のように説明できる。まず、神代文字は「祝詞」に使用されるから偽作しなければならないなかったのである。「祝詞」は神事に欠かせない儀式であり、神に捧げる神願文、感謝文、祝頌文、獻供文、奉仕文、装飾文等に使う文章である。このような「祝詞」は神道に於いて日常行なわれるが、

篤胤が神代文字を偽作する以前には漢字またはカタカナ、ひらがなが使われており、これに篤胤は不満を持った。なぜなら漢字は儒教からきた文字なので水と油の関係であり、カタカナ、ひらがなも仏教から出たものなので彼にとっては悪しき物であった。神事の時、このような文字を用いて「祝詞」を捧げることは容認できなかったのである。

次に、民衆に神国の思想を植え付ける方法として偽作した。先に述べたように、日本の精神を神代に遡って取り戻そうとする意図である。なぜなら日本の文化は外来文化に接触して得たもの、あるいは外来文化を受容して得たものなので、純粋な日本精神を求めるのは難しいとする。繰り返し言えば、神代文字は、日本の神から授けられた文字だと神秘性を与えるためなのである。ゆえに神字といい、また皇字、国字などといい、日本語（ひらがな、カタカナ）は異字と言った。

さらに、神代文字は神代から続いた神字であるとするのは、国外に日本の国威を高める為の方法であった。篤胤は日本神国のイデオロギーの優位性を世界万民に示そうとした。このような国粹主義思考が明治維新で表面化し、結局はアジア侵略にまでつながっていった。日本には神代から素晴らしい自国の文字があり、これが世界文字の母体になったという主張から、日本人は一等国民であり、日本は文化国家であるという優越感を生み出そうとした。⁽²⁵⁾ 吉田神道の主流は平田学問を根本として日本全国に広がったことに

より、神代文字は生き残った。

戦後の学界での平田学問に対する批評は厳しく、虚説に過ぎないと評される。

すなわち神代文字は偽作であつて朝鮮の諺文からきたとされている。だが平田学派を研究している神道家や国粹主義者達は今でも神代文字を信じ、研究を続けている状況があり、このような事実を広く知らせるべきである。

六、ハングルの日本伝播と神代文字が偽作された経路

韓日関係史に於ける不幸な時代として豊臣秀吉の朝鮮征伐（壬辰・丁酉倭乱）があげられる。この戦争は韓国歴史の中で忘れられない時代であり、韓日関係上初の侵略である。

従来の歴史家の中には、秀吉の朝鮮侵攻は中国大陸への侵略の一環として朝鮮を征伐したという見解があるが、今日の韓日関係史学から再検証すると秀吉の朝鮮侵略は韓国の文化を狙って起こされたものであると考えられる。朝鮮侵略によって多くの文化が日本にもたらされたことは、今日の日本国内にその証拠となる場所が多数あることからわかる。

畫員	良醫	醫員	接伴僧	使命	總人員 (大坂留)	使行錄	備考
李弘胤		朴仁基 辛春南	玄蘇	修好・回 答兼刷還	467	海槎錄(慶七松)	國交回復
柳成業		鄭宗禮 文賢男		大阪平定 ・回答兼 刷還	428 (78)	東槎上日錄(吳椒灘) 東槎日記(朴倅) 扶桑錄(李石門)	京都伏見 行禮
李彥弘		郭嶽 黃德業	規伯玄方	家光髮職 ・回答兼 刷還	300	東槎錄(姜弘重)	
金明國 (蓮潭 醉翁 荷潭)		白士立 韓彥協	玉峰光瑞 (東福寺) 棠陰玄召 (東福寺)	泰平之賀	475	丙子日本日記(任悅) 海槎錄(金東溪) 東槎錄(黃漫浪)	日本國大 君號制定 ・日光山 遊覽 康遇聖 著「捷解 新語」
金明國 (命國) 李起龍 (凡隱)			鈞天永浩 (建仁寺) 周南圓旦 (東福寺)	家綱誕生	462	東槎錄(趙龍洲) 海槎錄(申竹堂) 癸未東槎日記	日光山 致祭
韓時覺 (雪灘)		韓亨國 崔福 李繼勳	茂源紹柏 (建仁寺) 九岩中達 (建仁寺)	家綱襲職	488 (103)	扶桑日記(趙珩) 扶桑錄(南壹谷)	大猷院靈 廟致祭
咸憐健 (東載)	鄭斗俊	李秀蕃 周伯	太虛顯靈 (相國寺) 南宗祖辰 (東福寺)	綱吉襲職	475 (113)	東槎錄(金指南) 東槎錄(洪禹載)	副使裨將 洪世泰 (滄浪)
朴東普 (青丘子)	奇斗文	玄萬奎 李渭	別宗祖錄 (相國寺) 雲堅水集 (建仁寺)	家宣襲職	500 (129)	東槎錄(任守幹) 東槎錄(金顯門)	新井白石 의改革
咸世輝	權道	白興銓 金光泗	月心性堪 (天龍寺) 石霜龍宮 (東福寺)	吉宗襲職	479 (110)	海槎日錄(洪北谷) 海游錄(申青泉) 扶桑紀行(鄭后僑) 扶桑錄(金瀟)	
李聖麟 (蘇齋) 崔北 (居其齋)	趙崇壽	趙德祚 金德崙	翠岩承堅 (天龍寺) 玉籟守瑛 (東福寺)	家重襲職	457 (83)	奉使日本時間見錄 (曹蘭谷) 隨使日錄(洪景海) 日本日記	副使伴人 金啓升 (真狂)
金有聲 (西巖)	李佐國	南斗旻 成瀨	維天承瞻 (相國寺) 桂若龍芳 (東福寺)	家治襲職	462 (106)	海槎日記(趙濟谷) 癸未使行日記(吳大齡) 癸未隨槎錄 日本錄槎上記(成大中) 和國志(元重舉) 日東壯遊歌(金退石)	都訓導崔 天宗被殺
李義養 (信園)	朴景郁	金鎮周	月耕玄宣 (東福寺)	家齋襲職	336	辛未通信日錄(金履喬) 東槎錄(柳相弼)	對州易地

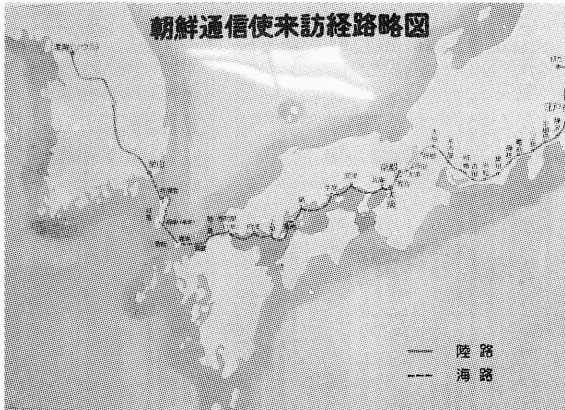
〈圖16〉朝鮮通信使一覽

年 代			正使	副使	從事官	製述官	書 記	譯 官	寫字官
西紀	朝鮮 日本	干支							
1607	宣祖40 慶長12	丁未	呂祐吉 (凝溪)	慶暹 (七松)	丁好寬 (一琴)	學官 楊萬世		金孝彝·朴大根 ·韓德男	書寫員 下鐵壽
1617	光海君9 元和3	丁巳	吳允謙 (楸灘)	朴粹 (雲溪)	李景稷 (石門)			朴大根·崔義吉 ·康遇聖·鄭純 邦·韓德男	宋孝男 嚴大仁
1624	仁祖 2 寬永元	甲子	鄭岏	姜弘重 (道村)	辛啓榮 (仙石)			朴大根·李彥瑞 ·洪喜男·康遇 聖	李誠國 (梅菴) 金信男
1636	仁祖14 寬永13	丙子	任忱 (白麓)	金世廉 (東溪)	黃屛 (漫浪)	史文 學官 權伏 (菊軒)	文弘績 文邱	洪喜男 姜渭賓 康遇聖 李長生	朴之英 能書官 全榮 (梅隱) 趙延珪
1643	仁祖21 寬永20	癸未	尹順中 (倅溪)	趙惇 (龍州)	申瀟 (竹堂)	讀祝官 朴安期 (螺山)		洪喜男 李長生	金義信 (雪峯)
1655	孝宗 6 明曆元	乙未	趙玠 (翠屏)	俞彬 (秋潭)	南龍翼 (壺谷)	讀祝官 李明彩 (石湖)	喪祿 金白輝 朴文源	洪喜男 金鍾行 洪汝雨	金義信 柳應發 鄭 琛 尹德容
1682	肅宗 8 天和 2	壬戌	尹趾完 (東山)	李彥綱 (驚湖)	朴慶後 (竹菴)	成嵬 (翠虛)	林 梓 李喆齡(鷗溪)	朴再興 卞承業 洪禹載	李三錫 (雪月堂) 李華立
1711	肅宗37 正德元	辛卯	趙泰德 (平泉)	任守幹 (靖菴)	李邦彥 (南岡)	李 碩 (東郭)	洪舜衍(鏡湖) 嚴漢重(龍湖) 南聖重(泛叟)	崔尚嶽 李頊麟 李松年 金始南	李壽長 李爾芳 (花菴)
1719	肅宗45 享保 4	己亥	洪致中 (北谷)	黃璿 (驚汀)	李明彥 (雲山)	申維翰 (清泉)	張應斗(菊溪) 成夢良(長嘯軒) 姜栢(耕牧子)	朴再昌 韓後瑗 金圓南	金景錫 鄭世榮
1748	英祖24 寬廷元 (延享5)	戊辰	洪啓禧 (澹窩)	南泰蒼 (竹裏)	曹命采 (蘭谷)	朴敬行 (矩軒)	李鳳煥(濟菴) 柳 迥(醉雪) 李命啓(海阜)	朴尚淳 玄德淵(疏窩) 洪聖龜	金天秀 玄文龜
1764	英祖40 明和元 (寶曆 14)	甲申	趙昌夔 (濟谷)	李仁培 (吉菴)	金相翊 (弦庵)	南玉 (秋月)	成大中(龍淵) 元重學(玄川) 金仁謙(退石)	崔鶴齡 (居今齊) 李命尹(華菴) 玄泰翼(長洲)	洪聖源 (景齋) 李彥祐 (梅窩)
1811	純祖11 文化 8	辛未	金履喬 (竹里)	李勉求 (南葭)		李顯相 (太華)	金善臣(清山) 李明五(泊翁)	玄義尙 (垣坦軒) 玄弼(一選) 崔昔(菊齋)	皮宗鼎 (東閣)

大正、昭和時代の日本の国文学者、山田孝雄は「豊臣秀吉の朝鮮征伐の際日本人であれば誰も朝鮮の文字を素晴らしく思い、それを欲しがる人が数多くて征伐の際たくさん書籍や文化財を朝鮮から盗伐していった」という⁽²⁶⁾。山田の指摘通り、当時、印刷職人たちが様々な方法で日本に連行されてきた。この時初めて韓国の文字が日本に伝えられた。

壬辰倭乱がきっかけで日本に渡った韓国の文字の読み書きの指導は、主として朝鮮王朝から派遣された通信使によって行われた。ここで朝鮮通信使についてみてみよう。

徳川期最初の通信使は一六〇七年（慶長十二）正使・呂祐吉、副使・慶暹、従事官・丁好・など総勢五百名余の人員が莫大な経費をかけて日本に招かれた。以後、派遣は十回（図16）に及ぶが、ついには幕府の財政を揺るがすほどの巨額をかけて諸行事が行われるまでになった。幕府は朝鮮通信使を招くのになぜ巨額の金をかけたのか。豊臣秀吉が朝鮮侵攻の際、甚大な被害を与えたこと、また徳川家康が自ら朝鮮の優れた文化を認め、李朝時代の儒学の受容を図ったことがあげられよう。李朝儒学というのは李退溪の朱子学であり、これにより従来の武家政治にはなかった君臣関係、身分差別を重視する封建支配の思想を堅固にしようとする徳川幕府の意図が潜んでいた。朱子学の中でも李退溪の学問がもつとも理想的な学問として受け取られ、幕府の正学になったのである。



〈図17〉

このような思想のもとで徳川幕府は大事な行事があるたびに必ず朝鮮通信使を招聘したのであった。通信使が入国し江戸城に着く途次、街の人々は立ち止まって頭を下げ、幕府の家臣たちは歓迎に最善をつくしたのである。

〔図17〕のように朝鮮通信使が漢城を出発して対馬↓壱岐↓下関↓鞆の浦↓大坂↓名古屋↓静岡↓江戸に行く途中、旅宿する場所ごとに大勢の日本の儒学者らが朝鮮の朱子学を学ぶために集まったが、中でも京都に於いては幕府の最高位儒官木下順庵（一六二一—一九八）は、通信使が泊った本能寺をしばしば訪れて朝鮮の朱子学を習い日本初の朱子学者になり、またハングルを最初に読み書きできるまでに至った。⁽²⁷⁾

木下順庵は門人たちに朝鮮朱子学を教えたが、その中の一人新井白石は朝鮮語を修得、通信使が日本にくるたびに通訳官に任命され、一七〇九年（宝永六）將軍家宣の時代には幕臣に登用、家宣の輔佐官として活躍する。



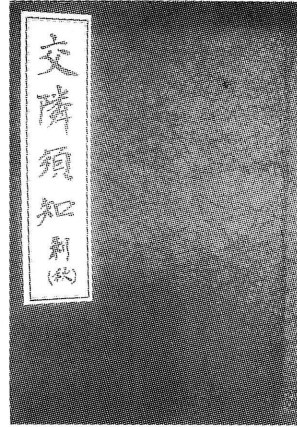
〈図18〉

また、順庵のもう一人の弟子に雨森芳洲（二六六八—一七五五）があげられる。彼は対馬藩の儒学者として釜山、長崎に遊学して朝鮮語を修得、来日通信使にも二度にわたり随行した。彼の業績は、その生国近江高月で朝鮮語塾を開き、朝鮮外交通詞を養成したことである（図18）。彼の作成した教材『全一道人』が一七二九年（享保十四）

に公刊されたのは、朝鮮通信使が九回来日後のことである。この教材の内容は、忠臣、孝子、節婦等の朝鮮説話であるが、日本語の表記の右側に朝鮮語でふりがなをつけ、朝鮮語の発音、文法、会話などを教えたのである。特に漢字の意味は、朝鮮語でふりがなをつけて教えたと考えられる。たとえば、

青い・プルダ 赤い・ブルダ 黄色い・ヌルダ⁽²⁸⁾
 などの内容となっている。

彼は朝鮮語を上手に使用して外交手腕を發揮し、老年期に書いた朝鮮語の教科書『交隣



〈図19〉 雨森芳洲の朝鮮語教材

須知（〈図19〉）は、明治期になっても京城で活躍する日本の資本家たちの必携会話教材として用いられた。この『交隣須知』の朝鮮語会話体を見ると、

「言」말을 만이하면 망발이 나니라
 言 多 妄發 出

コトバラ ヨケイニイエバ ホフバカレル

「辭」말을 공순히 하여라

コトバラ インキンニ イエ

「弄談」농담이 진담이 되니라

ヲドケカマコトニ ナリマスル

のように朝鮮のことわざを主な素材としてこれをハングルで表記し、その後日本語でふりがなをつけた。この『交隣須知』は全部で六十巻あまりであった。

こうして近世になって、朝鮮通信使の来日により江戸学問と称される朱子学が伝播され

ると同時に、朝鮮語を学ぶ高官や人々が増えたのである。

朝鮮通信使が九回目に来日したのは一七一九年（享保十四）であったが、その招請目的は徳川吉宗の將軍職就任祝賀であった。このとき、幕府の儒者であった荻生徂徠は、弟子の木下実聞と朝比奈之淵に朝鮮語を学ばせる目的で通信使が宿泊する名古屋の旅館に赴かせた。彼らは、通信使の書記官である姜栢（号・耕牧子）に教わり、製述官の申維翰（号・青泉）がハングルで作った教材『客館崔架集』で勉強した。朝鮮語を学ぶ教材としては上述の雨森芳洲の『全一道人』と『交隣須知』のほか、青木昆陽が作った『昆陽漫録』がある。

昆陽は一六九八年（元禄十一）江戸日本橋に生まれ、朝鮮語・朝鮮朱子学を学び、幕府の御書物御用達に任ぜられ古書典籍収集に専念、朝鮮通信使によって伝えられた朱子学に関する書籍や諺文の文書も多数収集したと推測される。青木は朝鮮諺文を深く研究し、一七六三年（宝暦十三）に『昆陽漫録』を刊行した。国語学者山田孝雄によると、

一般人に諺文というものを知らしめたのは青木敦書（あつのり）の昆陽漫録である。

その巻一の末に近い所に「朝鮮諺文」と標して、その字母表を示し、それに一々片假名でよみ方を注してある。この書は宝暦十三年に著したものだ。

すなわち、前述の雨森芳洲などの著述は上流層に知られていたのに対して、朝鮮語は『昆陽漫録』によって初めて広く一般人に知らされたのであると考えられる。

さて、篤胤による日本神道を世界的、普遍的な宗教に作るための基礎作業が行われていた。篤胤と同時代の服部中庸（国学者で篤胤の親友。篤胤は服部の影響で『靈能真柱』という有名な作品を残した）は当時の状況についてこう語っている。

篤胤は『書見著述に掛り候ては二十日三十日にても夜昼寝ことなく、勞し候時は三日五日も飲食せずして、臥て又覚候時は元のごとし』といわれているのであって、文化八年の終における行状は彼にとつて特異なものとはいえないのである。しかし普通に考えれば、これは単に熱心な態度というにとどまらず、偏執的異常さを示すといつてもいいであろう。いまこそ神道が興るべき時だと思ひ、日本の神道を世界的・普遍的なものとしようとしたことと、このような異常な性格・体質とが無縁なものとは考えられない。

『古史微開題記』に展開される「神代文字の論」は、前述した『昆陽漫録』（諺文教材）を参考に「神代文字」として偽作したのではないかと推測される。篤胤はなぜ神代文字

を偽作したのか。それは前述した通り日本神道を鼓吹して王政復古の政治を認識させるためであった。そして朝鮮の文字から偽作されたのは、創成当時から陰陽五行説に基づいた「訓民正音」が日本神道の教理に最も近く、文字の価値も何より優秀であったのである。当時の日本のカタカナとひらがなは、仏教の経典より作られたもので夢中妓字を避ける一方、漢字も儒教思想から伝搬されたので日常生活に砒霜と思われたためである。このように日本古来の文字がなかったので国学者平田篤胤は、駿河にある門人柴崎直古の家に閉じこもって飲食もせず『昆陽漫録』を見本として偽作したのであった。

このようにして偽作した文字に神代文字と名付け、人々に神代からあったものであると強調して、神代文字の神秘性への思いをより深くさせて、神道思想を鼓吹したのである。

七、近代に神代文字を普及した落合直澄

前章で神代文字を偽作した国学の大成者である平田篤胤について述べた。この章では平田学を後世に伝播させ、神代文字を普及した落合直澄について調べてみることにする。結論からいうと近世末に偽作された神代文字が近代国家に入って、その存在が明らか

になり全国津津浦浦にまで伝播したのは落合直澄の努力による。

彼は幕末一八四〇年（天保一）武蔵国多摩郡驅本野村で生まれ、はやくから国学に興味をもち、本居宣長の一番弟子の富樫広蔭の指導を受けて国学者として頭角を現わしはじめた。広蔭は宣長の死後、平田篤胤と親交が厚く平田学に関心を持ち国学の後裔者たちを養成したが、このなかの一人が落合直澄であり、平田学から強い影響を受けた。

彼は尊王思想の強い意志を持って国事に立ち回る日々を過ごしたが、明治維新が成就したことによって一朝にして立身出世、新政府における神祇官に就任した。神祇官は神道の祭祀あるいは神社行政を所管、新しい行政機構のなかで国家最高機関とされ、その権力は強大であった。

日本の神道がどうして成立してきたか、少し言及したい。神道は二世紀ごろ縄文時代の原始社会における自然崇拜のアニミズムなどから発し、実体がはつきり現われてきたのは北方から入ってきたシャーマニズムと南方から入ってきた農耕儀礼からはじまる一つの民族信仰である。⁽²⁹⁾ こんな実態を持った神道が六世紀ごろ大陸から入ってきた仏教、道教と融合・変質し始め、宗教としての体裁を整えて、神を祀る「ヤシロ」（神社）がおかれるようになった。九世紀ごろには平安貴族社会が形成されることによって、各所に数千の神社が置かれて、国家が神社を治め、国家の各種の行事もここで行われたので

神社を司る神主は国司の力を持って神社のある周辺地を治めた。

中世に入って神道と仏教が密接な関係となり、神仏習合思想が台頭することによって神道思想と仏教思想の一致運動が展開されて、どれが神道宗教でどれが仏教なのかを分別しがたい状況になった。なぜこんな神仏習合思想が展開されたのか。仏教の側は土着宗教に呼びかけたいあまり自然に神道に近づいてしまい、神道の側は平安時代の貴族たちが強力な勢力を神社で張っていたが、中世国家が成立し武家政治が実現すると、その勢力が弱体化し自然に仏教思想に融合されていった。今日でも各寺刹を見学すると、神道の儀式、儀礼に似ている形式を見ることが多い。

神仏習合体制下で起こった国学は、政治的には尊王思想による王政復古を唱え、宗教面では神仏融合思想を排除し打破しようとする動きを始めた。この思想が雪だるま式に肥大した結果、明治維新が断行されるやいなや実行されたのが廃仏毀釈政策であった。

廃仏毀釈はそれまでの神仏習合体制下にあった全てを分離する作業で、仏壇、仏具などが神社から持ち出されて焼却され、あるいは仏教儀礼を選び捨てて純粹な神道としての整備を行い、神社を本来の建築構造、神器による儀礼に戻す運動であった。このような行政措置による仏教弾圧は神祇省で実施されたもので、この時の落合直澄の勢力は飛ぶ鳥も落とすほどであった。



〈図20〉落合直澄の『日本古代文字考』

彼の勢力が強力であった当時の一八八八年（明治二一）七月に『日本古代文字考』が東京京橋区南伝馬町一丁目一二番地吉川半七により出版された。（図20）

それは平田篤胤の『神字日文伝』と同じ神代文字を取り上げた冊子で、彼はその序論で「古来字ノ説多シト難モ日文伝ノ上ニ出ルモノナシ。今日文伝ヲ根據トシ金石字等ヲ證トシ字源字父母ヨリ字子組織ノ理ニ至ルマデ我考ノ及ブ限り心諸ヲ盡スト雖モ猶杜撰ノ罪ヲ免レザラムトス。庶幾ハ識者ノ證正アラム事ヲ」と述べている。

〈図22〉で見るとように落合直澄の『日本古代文字考』に現われた神代文字は母音五字と父音一〇字を組み合わせている。平田篤胤が神代文字を偽作した時は母音五字と父音九字にしたが、明治期に入ってから落合直澄がU（ウ）を一つを追加して一〇字としたのである。そして真字の肥人書を阿比留文字、草字の薩人書は出雲字として〈図23〉に見るように草書に振り仮名と真字を付記した。

これまで神代文字が多く保存されていた場所は見

ウ	○	□	工	ナ	ク	コ	カ	合	ハ	ウ	父	母
	ウ	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト
ウ	イ	ロ	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト
	イ	ロ	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト
	エ	メ	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト
ウ	ア	マ	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト

〈図21〉落合直澄『日本古代文字考』から

使われているという。

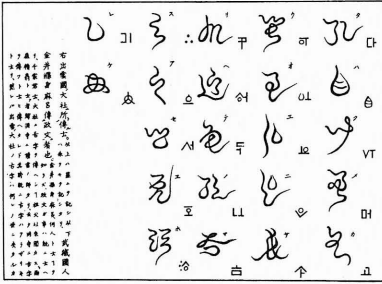
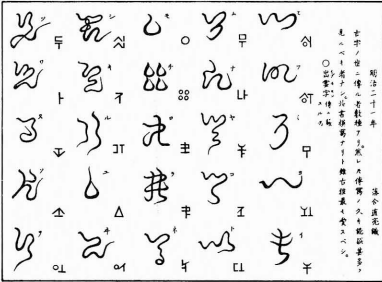
日文字		日文字	
ハ	ス	シ	ハ
合	フ	ハ	ハ
コ	ク	シ	ハ
ク	ル	シ	ハ
ル	コ	シ	ハ
コ	ル	シ	ハ
ル	コ	シ	ハ
ル	コ	シ	ハ
ル	コ	シ	ハ
ル	コ	シ	ハ
ル	コ	シ	ハ
ル	コ	シ	ハ
ル	コ	シ	ハ
ル	コ	シ	ハ

〈図22〉落合直澄、前掲書

るように下野国（栃木県）下都賀郡赤麻村の古塚（図24）で、これが発見されたのは一八八五年（明治十八）四月といわれている。

各神社の神主（神官）たちに普及させ、その後一八八九年（明治二二）退官後は、伊勢神宮の神宮教院で神道学を講義したがこの時、各地の神社に勤務する神主（神官）たちはこの神宮教院を卒業しなければ神社で働く資格を得られないようにした。

彼は自著『日本古代文字考』や平田篤胤の『神字日文伝』など神代文字についての研



〈図23〉 落合直澄、前掲書



〈図24〉 落合直澄、前掲書

究の全てを目錄に作成した。また、これらの書物は「神宮文庫」に保存されている。

このように神代文字は、国学者の平田篤胤が偽作し、明治政府成立後の政教一致期に、落合直澄が普及させ、国民の多くがその存在を教えこまれた。また、戦争期には落合直澄の後継である吾郷清彦が登場して、数多くの図書を出して神代文字を普及させ、また、今日では歴史学者として知られる佐治芳彦など多くの歴史家たちが神代文字は日本の固有の文字であつて平仮名と片仮名の母体であると述べ、はなはだしきはハングルは日本の神代文字から作られた、と主張する。日本全国の書店には彼らが書いた本が多数並ん

でいる。このような光景をみると、日本の国家主義が再び復活する雰囲気の中で、神代文字を定説化して、その価値観を確立しようとする目的以外にはないように思える。

注

(1) 神一行編『古代日本の謎』（ミステリー日本史第1巻）ベストセラーズ 一九九〇 二七—二八頁

(2) 平田篤胤『日文傳』一九五頁

(3) 平田篤胤『日文傳』一八四頁

(4) 平田篤胤 前掲書 三一頁

(5) 山田孝雄「所謂神代文字論」『芸林』四卷 中 二二頁 一九五三

(6) 山田孝雄 前掲書四卷 下 三三—三五頁

(7) 落合直澄「日本古代文字考」序文 明治二十一年七月

(8) 宮崎小八郎『神代の文字』序文及び二五九頁—二六〇頁 霞ヶ関書房 昭和四九年

(9) 山田孝雄 前掲書 四卷 上 二頁

(10) 佐治芳彦『謎の神代文字』徳間書店 一九七九 一四七—一四八頁

(11) 金允経『朝鮮文学及語学史』鮮一印刷所 檀紀四二七九年九月 一四七頁

(12) 同上

(13) 「京郷新聞」一九八六・七・一七付

(14) 宋ホシユ「ハンゲルは世宗大王以前にもあった」『広場』一号 一九八四 一四七—一四八頁

- (15) 宋ホシユ 前掲論文 一五五頁
- (16) 拙稿「津田とその時代」『文化誌』釜山外国語大学 一九九〇
- (17) 森有礼は明治政府が樹立されると、伊藤博文内閣で初代文部大臣となり、日本の近代教育推進に貢献した。一八八九年、伊勢神宮参拝の際、靴を履いたまま中に入ったという理由で国粹主義者によって暗殺された。
- (18) 犬塚孝明『森有礼』吉川弘文館 一九八六 一五八頁
- (19) 倉長巍『平岩愼保伝』教文館 一九三八 二一〇頁
- (20) 平岩愼保「日本文字ノ論」『六合雜誌』第五〇号 明治十八年一月
- (21) 平岩愼保「日本文字ノ論」『六合雜誌』第五〇号 明治十八年一月
- (22) 平岩愼保「日本文字ノ論(其二)」『六合雜誌』第五一号 明治十八年二月
- (23) 平岩愼保「日本文字ノ論(其二)」『六合雜誌』第五一号 明治十八年二月
- (24) 田原嗣郎『平田篤胤』新装版 吉川弘文館 一九八六 一一八頁
- (25) 山田孝雄「所謂神代文字論」『芸林』四卷 中 一九五二 九七頁
- (26) 山田孝雄 前掲書 四卷 下 三五頁
- (27) 李進熙「李朝の通信使」一五〇頁、昭和五四年五月
- (28) 李進熙「江戸時代と明治時代の日本における朝鮮語の研究」七六頁、一九八〇、一
- (29) 村上重良「国家神道」二頁四 岩波書店、一九七八、一〇
- (30) 落合直澄「日本古代文字考」一頁、一八八八

発表を終えて

私は日文研外国人研究員として来ましたが、初日、所長の山折哲雄先生に入所挨拶を終えて研究所運営協議員の方から「外国人研究員は自由に研究する所であるが、1年に研究論文1編と国際交流基金京都支部でフォーラムを1回しなければならぬ」とお聞きしました。

私はその後フォーラムのことが気になり、何のテーマで講演をするか、いろいろ考えたが以前から非常に興味を持つテーマがありました。

それは「神代文字」であります。

神代文字は日本の古代の文学であると日本列島の神社に沢山、書かれています。朝鮮語を知っている方は誰でもわかるぐらい朝鮮語に似ています。

今回「神代文字と日本キリスト教」について約40分程お話しをしましたが、これについてお聞きした方々がどうお考えになられたか分かりませんが講演後にある方から「なぜ、日本キリスト教は神代文字を認めているんですか」と質問を受けました。私は「明治の日本キリスト教者は受容の時から武士の精神を持ってキリスト教を取り入れたから非常に武士的キリスト教であり、近世末期頃国学者平田篤胤の思想を受けたからです。」とお答えしました。

神代文字は平田が「大和魂」を復活させるためにつくった文字です。世界にいろいろな文字がありますけれど朝鮮のハングルを模倣したのは単純ではなかったと思います。即ちハングル文字は陰陽五行説に基づき創造したからである。平田の神道は陰陽五行説に一番近い学問です。

私自身が心強くお話しをしたのは神代文字は過去の文字ではなく、現在日本・韓国・北朝鮮、3国がお互いに自国の文学であると論争が行われているからです。

今回講演について大変お世話になった松田利彦先生と研究協力課の篠原さんに感謝します。



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ Alessandro VALOTA (ピサ大学助教授) 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11	エンゲルベルト・ヨリッセン Engelbert JORI β EN (日文研客員助教授) 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー・A・トンプソン Lee A. THOMPSON (大阪大学助手) 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19	フォスコ・マライーニ Fosco MARAINI (日文研客員教授) 「庭園に見る東西文明のちがいが」
⑤	63. 6.14	SONG Wbi Chil 宋 曩七 (慶北大学校師範大学副教授) 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9	セップ・リンハルト Sepp LINHART (ウィーン大学教授) 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11	スーザン・J・ネイピア Susan J. NAPIER (テキサス大学助教授) 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13	ジェームズ・C・ドビンス James C. DOBBINS (オベリン大学助教授) 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」
⑨	元. 2.14 (1989)	YAN An Sheng 嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11	LIU Jingwen 劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9	スザンヌ・ゲイ Suzanne GAY (オベリン大学助教授) 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13	HSLA Gang 夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに—」

⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロゴバント Ernst LOKOWANDT (東洋大学助教授) 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8	キム・レーホ KIM Rekho (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12	ハルトムート O. ローターモンド Hartmut O. ROTERMUND (フランス国立高等研究院教授) 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3	WANG Xiang-rong 汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14	ジェフリー・ブロードベント Jeffrey BROADBENT (ミネソタ大学助教授) 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」
⑱	元.12.12	エリック・セズレ Eric SEIZELET (フランス国立科学研究所助教授) 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ Sumie JONES (インディアナ大学準教授) 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13	カール・ベッカー Carl BECKER (筑波大学哲学思想学系外国人教師) 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10	グラント K. グッドマン Grant K. GOODMAN (カンザス大学教授・日文研客員教授) 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8	イアン・ヒデオ・リービ Ian Hideo LEVY (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) 「柿本人麿と日本文学における『獨創性』について」
23	2. 6.12	リヴィア・モネ Livia MONNET (ミネソタ州立大学助教授) 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10	LI Guodong 李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉓	2. 9.11	MA Xing-guo 馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) 「正月の風俗—中国と日本」
㉔	2.10. 9	ケネス・クラフト Kenneth KRAFT (リーハイ大学助教授) 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ Ahmed M. FATTHY (カイロ大学講師) 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ Karel FIALA (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12	アレクサンドル A. ドーリン Aleksandr A. DOLIN (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5	ウイベ P. カウテルト Wybe P. KUITERT (ワーゲニンゲン大学研究員) 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
③①	3. 4. 9	ミコワイ・メラノビッチ Mikołaj MELANOWICZ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー Beatrice M. BODART-BAILEY (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) 「三百年前の京都—ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11	サトヤ B. ワルマ Satya B. VERMA (ジャワハルラル・ネール大学教授・日文研客員教授) 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9	ユルゲン・ベルント Jürgen BERNDT (フンボルト大学教授・日文研客員教授) 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」
③⑤	3. 9.10	ドナルド M. シーキンス Donald M. SEEKINS (琉球大学助教授) 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8	WANG Xiao Ping 王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」

③⑧	3.12.10 (1991)	HONG YoonSik 洪 潤植 (東国大学校教授) 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウイトリ・ウイシユワナタン Savitri VISHWANATHAN (デリー大学教授・日文研客員教授) 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10	ジャン=ジャック・オリガス Jean-Jacques ORIGAS (フランス国立東洋言語文化研究所教授) 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14	リブシユ・ボハフモコヴァ Libuše BOHÁČKOVÁ (プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授) 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12	ポール・マッカーシー Paul McCARTHY (駿河台大学教授) 「谷崎文学の『読み』と翻訳: アメリカにおける 最近の傾向」
43	4. 6. 9	G. カメロン・ハーストⅢ G. Cameron HURST III (ニューヨーク市立大学リーマン広島 校学長・カンザス大学東アジア研究所長) 「兵法から武芸へ—徳川時代における武芸の発達—」
44	4. 7.14	Yoshio SUGIMOTO 杉本 良夫 (ラトロブ大学教授) 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8	WANG Yong 王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授) 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13	LEE Young Gu 李 榮九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10	ウィリアム D. ジョンストン William D. JOHNSTON (ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本疾病史考—『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8	マノジュ L. シュレストハ Manoj L. SHRESTHA (甲南大学経営学部講師) 「アジアにおける日系企業の戦略転換 —技術移転をめぐる—」

④9	5. 1.12 (1993)	PARK Jung-Wei 朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9	マーティン・コルカット Martin COLLCUTT (プリンストン大学教授・日文研客員教授) 「伝説と歴史の間—北條政子と宗教」
⑤1	5. 3. 9	Yoshiaki SHIMIZU 清水 義明 (プリンストン大学マーカンド荣誉教授) 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13	KIM Choon Mie 金 春美 (高麗大学校教授・日文研来訪研究員) 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11	タキエ・スギヤマ・リブラ Takie SUGIYAMA LEBRA (ハワイ大学教授) 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8	H. W. KANG 姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 —科举制度をめぐる—」
⑤5	5. 7.13	ツベタナ・クリステワ Tzvetana KRISTEVA (ソフィア大学教授・日文研客員教授) 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14	KIM YongWoon 金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12	オロフ G. リディン Olof G. LIDIN (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9	マヤ・ミルシンスキー Maja MILCINSKI (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) 「無常観の東西比較」
59	5.12.14	ウィリー・ヴァンドゥワラ Willy VANDEWALLE (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン J. Martin HOLMAN (ミシガン州立大学連合日本センター所長) 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」

61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ Maya GERASIMOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8	オギュスタン・ベルク Augustin BERQUE (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12	リチャード・トランス Richard TORRANCE (オハイオ州立大学助教授) 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880~1930」
64	6. 5.10	シルバーノ D. マヒウォ Sylvano D. MAHIWO (フィリピン大学アジアセンター準教授) 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14	LIU Jian Hui 劉 建輝 (南開大学副教授・日文研客員助教授) 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12	チャールズ J. クイン Charles J. QUINN (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」
67	6. 9.13	フランソワ・マセ François MACÉ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥⑧	6.11.15	JIA Hui-xuan 賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20	PENG Fei 彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦⑩	7. 1.10 (1995)	ミハイル V. ウスペンスキー Michail V. USPENSKY (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) 「根付—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクション を中心に—」
⑦⑪	7. 2.14	YAN Shao Dang 嚴 紹澧 (北京大学教授・日文研客員教授) 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのか かわり—」

72	7. 3.14 (1995)	WANG Jiahua 王家驊 (南開大学教授・日文研客員教授) 「洪沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
73	7. 4.11	アリソン・トキタ Alison TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」
74	7. 5. 9	リュドミラ・エルマコワ Liudmila ERMAKOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6	パトリシア・フィスター Patricia FISTER (日文研客員助教授) 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25	CHOI Kii-Sung 崔吉城 (広島大学総合科学部教授) 「『恨』の日韓比較の一考察」
77	7. 9.26	SU Dechang 蘇徳昌 (奈良大学教養部教授) 「日中の敬語表現」
78	7.10.17	Li Jun Yang 李均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28	ウィリアム・サモニデス William SAMONIDES (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
80	7.12.19	タチヤナ・ソコロワ・ワオデリユシナ Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA (翻訳家・日文研来訪研究員) 「俳句の国際性—西欧の俳句についての一考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク John CLARK (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」
82	8. 2.13	ジェイ・ルービン Jay RUBIN (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12	イザベル・シャリエ Isabelle CHARRIER (神戸大学国際文化学部外国人教師) 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」

84	8. 4.16 (1996)	リース・モートン Leith MORTON (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
85	8. 5.28	マーク・コウディ・ポールトン Mark Cody POULTON (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) 「能における『草木成仏』の意味」
86	8. 6.11	フランシスコ・ハビエル・タブレロ Francisco Javier TABLERO (慶應義塾大学訪問講師) 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30	シルヴァン・ギニヤール Silvain GUIGNARD (大阪学院大学助教授) 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10	ハーバート E. プルチヨウ Herbert E. PLUTSCHOW (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) 「怨霊の領域」
89	8.10. 1	WANG Xiu-wen 王 秀文 (東北民族学院助教授・日文研客員助教授) 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」
90	8.11.26	WANG Bao Ping 王 宝平 (杭州大学日本文化研究所副所長・日文研客員助教授) 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
91	8.12.17	CHEN Shen Bao 陳 生保 (上海外国語大学教授・日文研客員教授) 「中国語の中の日本語」
92	9. 1.21 (1997)	アレクサンダー N. メシエリヤコフ Alexander N. MESHCHERYAKOV (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪研究員) 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18	KWAK Young-Cheol 郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) 「言語から見た日本」
94	9. 3.18	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL (スペイン・マドリード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) 「弁当と日本文化」

95	9. 4.15 (1997)	ミケーレ F. マルラ Michele F. MARRA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校準教授・日文研客員助教授) 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13	デニス・ヒロタ Dennis HIROTA (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 パークレー仏教研究所準教授) 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10	ヤン・シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」
98	9. 7. 8	キンヤ ツルタ 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロロンビア大学教授・日文研客員教授) 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9	ポーリン・ケント Pauline KENT (龍谷大学助教授) 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14	セオドア・ウィリアム・グーゼン Theodore William GOOSSEN (ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11	KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授) キンヤ ツルタ 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9	ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授) 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

⑩4	10. 2.10 (1998)	GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授) 「中世禪林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授) 「和魂漢才、和魂洋才——語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文化研究員) 「映画と文学の間に——金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩8	10. 6. 9	Hiroshi SHIMIZU 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) 「化粧の文化地理」
⑩9	10. 7.14	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文化研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ——詩的イメージとしての典故——」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文化研究員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑩11	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文化研究員助教授) 「『愛玩』——安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑩12	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシユ大学助教授・日文化研究員助教授) 「『道行き』と日本文化——芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑩14	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文化研究員助教授) 「『中』のシンボリズムについて——宇宙論からのアプローチ」

115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪⑧	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫⑩	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫⑪	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫⑫	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫⑬	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアド Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫⑭	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

125	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
126	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナマリア・トレンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
128	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」
129	12. 5. 9	KIM Jeong Bye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
130	12. 6.13	ケネス・L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
132	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
134	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」

⑬③⑥	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬③⑧	13. 4.10	Li Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬③⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」
⑬④①	13. 6.12	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑬④②	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ キム ラ スティーン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑬④④	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」

⑭	14. 2.12 (2002)	マシミリアーノ ト マシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 惠卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」
150	14. 5.14	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑮	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
153	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑯	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」

157	15. 1.14 (2003)	デビッド L. ハ ウ エ ル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊仇討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 暁梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オ カ ダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉? : 言語と国民国家」
⑩	15. 4. 8	ビル ス ウ エ ル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 鎔烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RIHEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツ イ ゴ バ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダ ニ エ ル ス Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
165	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
166	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授 日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」

15.12. 9
(2003)

エフゲニー S. バクシエエフ

Evgeny S. BAKSHEEV

(国立ロシア文化研究所研究員 日文研外国人研究員)

「人と神とが会える場所」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2003年12月26日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075)335-2048
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

© 2003 国際日本文化研究センター

■ 日時

2002年11月5日（火）

午後2時～4時

■ 会場

国際交流基金 京都支部

第五回

神代文

字之日

本手り

又入教

金

文

言

國

版

日

本

文

化

何

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々